

明日の県立図書館を思う

福島礼子さん(株式会社ケーブルネット鈴鹿ディレクター)

図書館という存在

静脈ではなく動脈的な図書館がよいと思う。

県立図書館はあまり利用しない。仕事の関係で図書館へ行くとすればまずは鈴鹿市立図書館。但し自分の本がまずあって、特殊なものは友人や関係者から借りて、それでもなければ県立図書館の本を取り寄せるということをしている。

現在は、三重県にゆかりのある文学者・文学作品を紹介する「フィルム文学館」、郷土の歴史を掘り起こす「時の散策」、県内の美術館の企画展を紹介する「美の扉」を担当。

発信する、見せる

全てを所蔵するのは大変だと思うが、県のことはここに行けば分かるというような本を所蔵する使命はあると思う。さらにこれをもとに「発信する」というところへも踏み込む必要があるのではないか。待っているだけでは駄目。

濃密な空間に入ると脳が活性化されると言われることがあるが、図書館はどちらかというと博物館的な感じがする。本の並べ方のせいか、発見の楽しみがないし、刺激を受けない。企画展のようなものとして、
が選んだ××コーナーとか、仕切りとかで別スペースにしたコーナーがあってもよいと思う。批評をするとすると、一冊の本から何冊にも広がる。分類による配列は、あれはあれで大事だが、また、本だけでなく映像やグッズがあってもよいのでは。

ケーブルテレビの「図書館」化

これから、テレビを今以上に見るかというそうとは思えない。多チャンネルを満喫するよりも、むしろインターネット配信やDVDなど、見たいものを自分で選んで見る時代に(若い人たちが)なる可能性がある。あるいはシニア層にとっては、見る時間よりも、読む時間を大切にする層が増えるかもしれないと思う。そう考えると、図書館にとってはチャンスであり、本というものをPRするということはあると思う。またこれからはテレビが図書館化しないといけない。ケーブルテレビも、県立図書館と同様に地方色、資料保存的機能を重視している。いわゆるビジュアルでの図書館機能を持たなければならないと考えている。古いメディアフォーマットの映像については、デジタル化(焼き直し)しているが、限界があって編集前の元のテープなど処分したものもある(マスターは保存しているが)。鈴鹿の場合、祭りなどは公共と連携して残す努力をしている。

皆にうけるというもの、流れていくものではなく、あれは見たいというものを作っていく。万人に受けるようなものをというのは難しいので、図書館でも細かいものを打っていけばよいのではないか。子どもとその親向け、高齢者向け、など。

企画者はお膳立てをするコーディネーターであるべき。

Q. 市民活動をする人がなぜ図書館を使わないのだろうか？

A. 建物がよくないと思う。わいわい話ができるような、ボランティア活動の為に使えるような部屋・サロンがないからではないか。

Q. 司書の専門性はどこまで必要か？

明日の県立図書館を思う

福島礼子さん(株式会社ケーブルネット鈴鹿ディレクター)

A. 検索のプロであるべき。対象は本だけでなく映像資料も含めて。

Q. 図書館で映像の収集をするべきか？

A. それは望まれると思う。特に地域性の高いもの。残す媒体としては、今はDVDが一番だが、その次は時代によって変わっていくだろう。